

昔むかし、あるところに、兄さんと妹がいました。

ある日のこと、お母さんがよそへ出かけることになりました。お母さんは、子どもたちにいいました。

「おまえたち、お母さんはこれから出かけるけど、しっかりとるすばんしていてね。かきねの戸にはくれぐれも気をつけるのよ」

お母さんは、どろぼうが入ってこないように、かきねの戸に気をつけなさいといったのです。

お母さんが出かけてしばらくすると、子どもたちはたいくつになってきました。そこで、兄さんが、

「ねえ、森へ行って少し遊んでこようよ。かきねの戸は持っていけばいいだろ」といいました。妹はよろこんで、さっそくふたりでかきねの戸をはずすと、それをだいに持って、森へ出かけていきました。

子どもたちは、森の中をかけまわって遊んでいるうちに、道にまよってしまいました。あたりはだんだん暗くなり、今夜はもううちに帰れそうにありません。ふたりは、おそろしいけものに食べられるのではないかと、こわくなってきました。そこで、大きなかしの木に登って朝になるのを待つことにしました。子どもたちは、かきねの戸をだいに持って、木に登っていきました。

ふたりが木の上でじっとしていると、まもなく、どろぼうたちが大きなふくろを引きずってやって来ました。そして、かしの木の下まで来ると、ふくろを開けて、ぎっしりつまったお金を数えはじめました。

ふたりは、どろぼうに気づかれないように、木の上でじっとしていました。

しばらくすると、兄さんが妹にささやきました。

「おしっこがしたい。もうがまんできないよ」

妹は、

「そう。じゃあ、したらいいじゃない」といいました。兄さんは、木の上からおしっこをしました。木の下のだろぼうたちは、

「おや、雨がふってきたぞ」といいました。そして、またお金を数えつづけました。しばらくすると、また、兄さんがささやきました。

「ねえ、うんこがしたい。もうがまんできないよ」

「そう。じゃあ、したらいいじゃない」

兄さんは、木の上からうんこをしました。どろぼうたちは、

「くそ。鳥のやつ、頭にふんをひっかけやがったぞ」といいました。そして、やっぱりお金を数えつづけました。

木の上の子どもたちは、じっとしずかにしていました。しばらくすると、また、兄さんが妹にささやきました。

「このかきねの戸、重くてもう持ってられないよ」

「そう。じゃあ、手をはなしたらいいじゃない」

兄さんは手をはなしました。かきねの戸はどろぼうたちのまんなかに落ちました。

「うわあ。かみなりが落ちてきたあ」

どろぼうたちはそうさけぶと、大あわてでにげていってしまいました。

朝になりました。兄さんと妹は木から下りて、かきねの戸をだいにひろいあげました。

そして、どろぼうたちがおいていったお金をぜんぶひろいあつめて、うちへ帰りました。

うちに帰ると、お母さんが、ふたりをしっかりとりました。

「おまえたちが、かきねの戸に気をつけなかったから、どろぼうに入られてしまったよ。うちの中の物をみんなぬすまれてしまったんだよ」

けれども子どもたちは、森の中でどろぼうに出会ったこと、そして、どろぼうがほつたらかしていったお金をぜんぶ持ってかえってきたことを話しました。お母さんは、大よろこびしました。

そして、そのお金で、テーブルやら着物やら食べ物やらを買いました。それでもお金はまだまだたっぷりあまったので、お母さんとふたりの子どもは、一生楽にくらすことができましたとき。